

教員研修会 教育講演

先輩からの伝言

芝 紀代子*

〔Key Words〕 臨床検査学教育、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力

はじめに

私が臨床検査学教育に携わって 45 年になります。「先輩からの伝言」という演題名で本講演の依頼を受けました。私の教育経験が若い教員の方々に少しでも役に立つならと、引き受けました。

最初に私の教育歴についてです。私が教員になりましたのは、昭和 42 年(1967 年)です。東京医科歯科大学医学部付属病院検査部の文部教官助手として採用されました。東京医科歯科大学には附属の衛生検査技師学校がありました。検査部の教官は衛生検査技師学校で教えるのも職務の一つで、臨床化学の講義・実習を担当したことが検査技師教育に携わった始まりです。

20 年ほど検査部にいましたので仕事の中心は検査業務でしたが、平成元年(1989 年)に臨床検査技師学校と看護学校の 2 つが一緒になって、東京医科歯科大学医学部に保健衛生学科が誕生しました。私は保健衛生学科の助教授として移り、それからは教育一筋となりました。通算 39 年、東京医科歯科大学に勤務しながら、西武学園医学技術専門学校臨床検査技師学科、文京学院医学技術専門学校、栃木県立衛生福祉大学校での非常勤講師として臨床化学を教え、私が薬学出身なので、共立薬科大学の大学院で臨床検査の講座、そして

明治薬科大学で臨床化学の講座を担当いたしました。平成 18 年定年退職時に、文京学院大学に保健医療技術学部が開部しましたので、臨床検査学科の教員としてまたもや臨床検査技師教育に携わることとなりました。

通算いたしますと、45 年の長きにわたってやっていることになります。教員になったのは私が 26 歳の頃ですので、最初は学生との間は姉と妹のような関係でした。そのうちに、母と子の関係になって、今は祖母と孫というほど年齢差が開いています。教員は年齢を重ねていきますが、教える学生は毎年同じ年齢です。当然学生の気質も変わってきますし、教育のツールもまた教える内容も時代に応じて変えていかなければなりません。やはり努力が必要になってきます。

教員の仕事は非常に多岐にわたっております。学生教育だけでなく、学内行事、学内委員会、学会活動、学外の委員会それに勿論研究もやらなければなりません。その中で、やはり一番ウエイトを占めているのは教育でしょう。

今まで人類は、“聞く・話す・読む・書く”による教育によって科学を発展させてきました。“聞く・話す”ためにはプレゼンテーションの能力とコミュニケーション能力、“話す”には幅広い知識の習得、“書く”では自分自身を表現する

*文京学院大学大学院保健医療科学研究科 kshiba@bgu.ac.jp

能力が必要になってきます。教育によって科学が発達してきたわけですから、教員としてこれらの事項は是非身に着けておきたいものです。そこで私の教員生活を振り返り、反省の意味も込めまして、本講演では2つのテーマ、プレゼンテーション能力とコミュニケーション能力についてお話いたします。

I. プレゼンテーション能力

1. プレゼンテーションとは

プレゼンテーションには、プレゼントをあげる対象としての相手が強く意識されます。プレゼントの成否はもらった人が決めることです。プレゼントをもらっても、もらう側が欲しいかどうかということに大きく関係してきます。そうしますと、教員は学生に何をプレゼントすればよいのでしょうか。「知」をプレゼントすることです。教員は常に聞き手、即ち、学生に対してプレゼントをする時は「聞き手本位に徹する」ということが非常に大切です。

プレゼンテーション能力を磨くことで、授業力の向上にもつながります。そのために意識してもらいたいことがあります(図1)。1つ目は、聞き手(学生)が主役だということ。2つ目は伝えたいこと(目標)と与えられた条件(場面)のバランスです。特に大切なのは教える内容と授業時間とのバランスです。3つ目はタイムマネジメントの徹底です。例えば、与えられた時間を90分だとします

と、過不足なく使い切ることです。4つ目に「振り返り」と「改善」です。計画を立てて、実施し、そして、今日の授業はどうであったか振り返る。この振り返るということが、非常に大切です。私も授業が終わるたびに反省しています。教え始めから完璧な授業はできません。振り返りながら、見直して、充実した授業ができるように工夫してくださいということを、若い先生方にぜひお伝えしたいと思います。

学生のモチベーションを高めるということも非常に大切です。学生のモチベーションが高くなるには大切な3つの要素があります。授業内容がよく理解できたという「達成感」、授業内容が面白く、非常にためになったと感じる「充実感」です。それから、もう1つ、やはり学生に持ってもらうなければならないのは「義務感」です。よって「達成感」、「充実感」、「義務感」の3つです。このうち、どれが鍵になるのかといいますと、「達成感」と「充実感」です。これらを生み出すための最も大切な要素は、授業が「分かりやすい」ことです。「分かりやすい」と感じると、学生は理解しようと努力します。

分かりやすい授業の5つの条件です。1つ目はまず、具体的に話すことです。“そこまで言わなくても分かるだろう”と思いつままないことです。2つ目に大枠から話すことです。細かいことはさておき、今日はこういうことを話しますと言ってから、詳細に入ることが大切です。3つ目

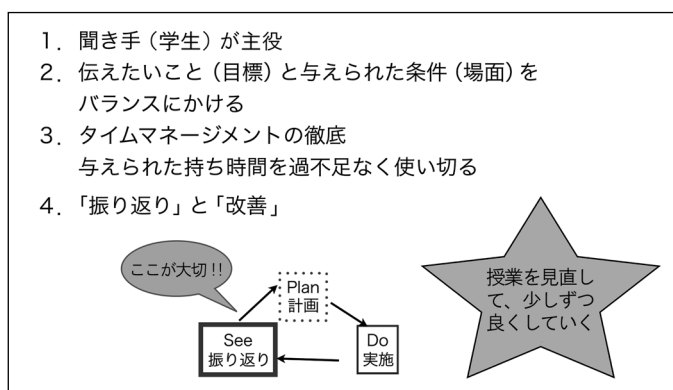


図1 プレゼンテーションを磨くことが授業力の向上につながる

に学生が理解しやすいように、段階的に話すことです。4つ目は言葉で説明しきれないものを補うために他のチャンネルを使うことです。それには身振りや表情で示す非言語メッセージ、黒板に板書することやスライドを見せるといった視覚資料が挙げられます。5つ目は授業の内容を欲張らないことです。これもあれも教えてあげようとする、内容がどんどん薄まっていきますから、ポイントを絞って教えるということが大切です。

2. 授業の構成の基本

学生が「授業を聞こうという体制づくり」をするためには、授業の構成の基本(準備、授業の開始、授業内容、授業のまとめ)を守ることです。

準備とは、90分授業で「どこを教えるか」、「どこまで教えるか」と授業の目標を決めます。そして、原則的には90分の授業は「1話完結型」にすることです。

授業を開始するときいきなり、「今日は50ページから始めます」ではあまりにもそっけないです。まず、学生を引き付けなければなりません。そのために話題提供をしましょう。学生側の話題、時事的な話題、教員側の話題など、軽いタッチで話を始めましょう。

授業の内容で大切な表現があります。言語表現としてあげられるのが、つなぎの言葉です。「では」とか、「そして」などのように、話の区切りにつなぎの言葉を入れると話が大変わかりやすくなります。次に大切なのは非言語表現で、これには音声系と非音声系があります。音声系は声の大きさ、高さ、話のスピード、話の間、抑揚などが挙げられます。非音声系として、身振り、手振り、表情、アイコンタクトなどです。

授業中によく使う言い回しでの注意点です。「ここは試験によく出ますからね」を、タイミング良く言うと、非常に効果的ですが、言い過ぎると逆効果になります。大体90分の授業で2~3回程度が効果的です。また、「今までのところ、分かったかな」「君たち、本当に分かっているのかな」と、見下した言い方をする先生がいます。もし学生が「分かりません」と答えたら、教え方が悪いことになります。こういう聞き方もあまり良

くありません。

「時間がないので、ここは飛ばしていきます」という先生がいます。これは教員の授業配分が悪いことの証になってしまいます。授業配分は授業にとって重要なポイントです。

板書の仕方です。私は板書をしながら、延々としゃべりました。なぜならば、しゃべらないと、沈黙の時間がありこれが居心地悪かったのです。しかしそれは間違いだったと気づきました。学生側にとっては、未知の知識について話を聞く、理解する、ノートを取ると3つの作業を同時に行うのは非常に難しいことです。ですから、黙って板書をする。板書し終わったら、学生がノートに写し終わるまで待つ。それから説明するということが大切です。

授業ツールとして、最近は板書よりもスライドを使う教員が多くなりました。どちらがいいか論議の余地がありますが、2つのツールの長所・短所を図2に示しました。板書の長所は学生が小さい時から慣れていますが、それからリアル感があります。一方、スライドは多くの情報を効果的に与えます。また授業中の教員の負担が少ないのも長所です。板書の短所は書いた字が読みにくいと学生から不満がでます。雑な板書は効果が半減します。スライドの短所は全体の情報が過多になりやすく、スライドの内容を読むので、どうしても授業のスピードが速くなりがちで、学生にとっては、メモが取りにくくなります。どういう風に使い分けしたら、より効果的な授業ができるか、今後、教育研修会で議論してください。

授業を構成するうえで言語表現以外に大切なのは非言語表現です。4つの要素、アイコンタクト、ボディランゲージ、表情、対人距離が挙げられます。1つ目はアイコンタクトです。黒板の方に向けて学生を全く見ない教員がいますが、これは駄目です。必ず教室の4隅と真ん中に目が合う学生を見つけておくことです。そうすると、満遍なく視線を配ることができます。2つ目はボディランゲージです。大事なところでジェスチャーを入れると効果的です。3つ目は表情です。学生を意識してつくる表情は笑顔、授業内容を意識するとき

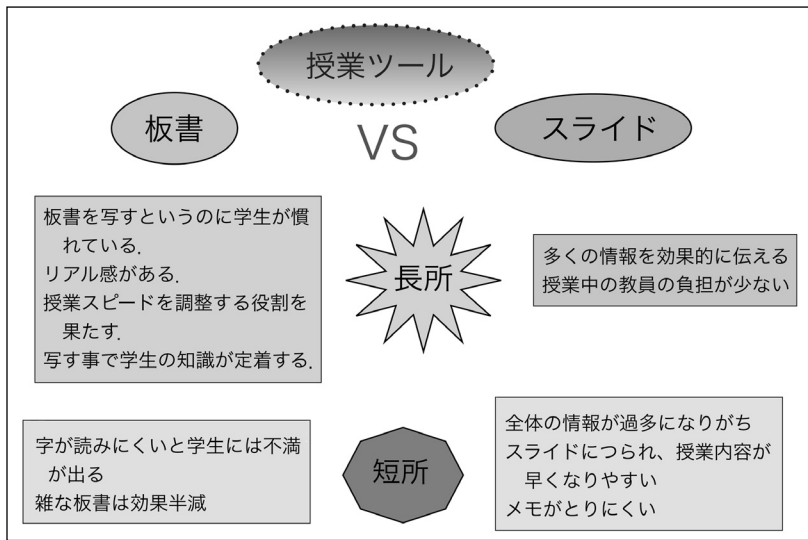


図2 板書とスライドの長所・欠点

には冷静な表情。重要なポイントのときは声と表情をワンテンポ上げると効果的です。4つ目は対人距離です。学生との距離を近づけることです。できれば90分授業では2回ほど、教壇から降りていくことを勧めます。学生にメッセージとプレッシャーを与えるという意味で効果的です。

授業の終わりです。「では、これで終わります」。これはちょっと素っ気ないです。授業の5分ほど前に講義を終えて、そして講義のまとめに入ります。今日の授業のポイント、次週の予告などを簡潔に述べると授業全体がピシッとします。

3. 学生から好まれない教員

学生から好まれない教員の例をいくつか挙げてみます。

*脱線する教員

「この話題は受ける！」という勘違いを捨ててください。教員のプライベートの話題は特に要注意です。1回目は受けますが、受けると思って、しつこくやると「またか」と嫌われてしまいます。ただし、ハードな授業の間にちょっと息抜きに適当な雑談を入れることは大切です。雑談はできるだけ、授業の内容にフィットするように心がけてください。例えば、尿酸についての講義の合間です。「痛風の初期症状は足の指の親指が腫れるの

は何故？」と学生に問いかけます。学生は急に生き返ったように真剣に考えます。「それは、体温が1番低いところだからです。手で足を押さえてみてください。足の方が冷たいですね。」

学生は“なるほどそうなのか”という顔をします。「だから足湯がはやるわけですね。足を温めると血流もよくなりますよ。皆さんもシャワーだけではなく、ゆっくりお風呂に入り、特に足を温めてくださいね」とこういう風に言います。講義に関連した脱線は好感をもたれます。日頃からネタ探しをしておくことも必要です。

*授業のスピードが速すぎる教員

学生にとって90分間、話を聞いて、すべてを理解するのは非常に難しいことです。適当な間を取って、話のスピードを調節します。例えば、切れ目ごとに「これまでいいですか？」と聞くことも一つの方策です。

*クドクドと説教する教員

「最近の君たちを見ていると、やる気が感じられない。こんなことだと、国家試験に落ちるよ」からはじまって、クドクドと説教する教員がいます。こんなこと言われて、喜ぶ学生は誰もいません。説教するときはスパッと一言の方が、学生にはむしろ堪えます。

*気分屋の教員

その日の気分によって、言うことがコロコロ変わる。これも好まれない教員です。初回のガイダンスの時に、学生側に、「私はこういうことは注意しますよ。授業中の私語は絶対、駄目です。周りの学生の迷惑になります。居眠りや内職は注意しません。それは、はたには迷惑かけないからです。でも、授業を聞いてない分損しますよ」というように自分のきちんとした方針を決めておく。何事も終始一貫、ぶれないことです。

*講義ノートや教科書を読むだけの教員

授業というのは、読み上げるのではなくて学生に語りかけることが大切なのです。ですから、板書やスライドを使って、効果的な授業を心がけることが大切です。

II. コミュニケーション能力

1. コミュニケーション(ラテン語の **Communi-care** : 共有するという意味)とは

学生に対しては臨地実習に行く前に接遇教育を行っていますが、何故か教員にはコミュニケーション能力が欠如している人がいます。教員は変わり者でもいいという風潮もありますが、これは間違いです。

授業は知識や考え方を享受するための「1対多数」のコミュニケーション行動です。1人の教員が約80人の学生に教えます。メッセージ(伝達内容)を教員が言葉(コード:日本語)で伝えます。

学生は解読します。聞き手の学生の解読は千差万別です。そこが、講義の難しいところです。そのことを講義におけるコミュニケーションギャップという言葉で表します。約80人の学生の前で講義をし、学生全員が意図した通りの解読ができるのは非常に奇跡に近いのです。教員に求められる役割は、学生がおおむね意図した意味付けをしてくれるように、学生の心の動きを配慮しながら、授業を作っていくということが大切になってきます。

人は第一印象で決まります(図3)。人が人と出会った瞬間に、視覚(表情・態度)と聴覚(声のトーン・言葉遣い)が働き、即感情が動きます。この人は感じが良い人、感じが悪い人との振り分けが瞬時に行われ、感じが良いと思えば、非常に好意的な気持ちになり、コミュニケーションが良好に進みます。感じが悪いと思えば、不快感を高めます。ですから、最初の授業の時に学生が教員に好意的な気持ちを持つということが重要です。

コミュニケーションはキャッチボールです。自分(教員)が話します。相手(学生)が答えます。そして、自分が相手の思いや考えを受け止めます。そして相手が返す。これがコミュニケーションの基本です。

2. コミュニケーションの体系

コミュニケーションスキルの体系を図4に示しました。その主なものは“伝える”、“問いかける”、“聴く”の3つです。双方性のある聴き

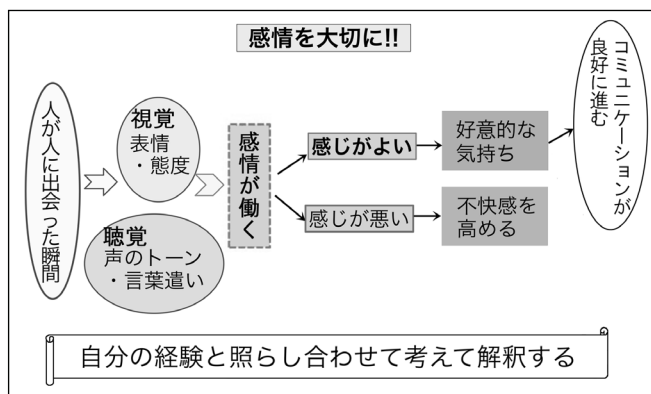


図3 人は第一印象で決まる

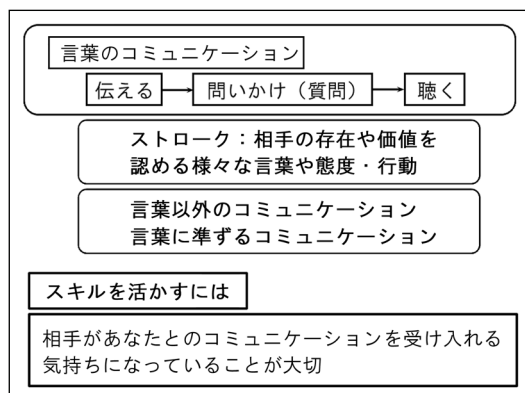


図4 コミュニケーションスキルの体系

方が6つあります。受容する(「うなづき」、「相づち」など)、促す(「もう少し聞かせていただけますか」など)、応答(反復)する(「毎日、続けているのですね」など)、要約する(「つまり、変更してほしいということですね」など)、共感する(「楽しそうですね」)、そしてフィードバックする(「とてもお元気になられた気がいたします」など)の6つです。

必ず「聴いていますよ」というシグナルを出すということも非常に大切なことです。それにはうなづく(首を縦に振るしぐさ)、相づち(「ええ」、「なるほど」、「そうですね」など)、繰り返し(相手のお話の“キーワードや感情の言葉”を繰り返す)、そして共感(相手の話の中から感じ取った感情を短い言葉で返す)することです。

“聴く”の基本態度があります。聴く態勢というのは、仕事の手を休めて相手の方に顔を向ける。相手の方に軽く体を傾けて、しっかりと目を見る。手足などは動かさない。自分の話はしない。聴くということは徹底して相手に話をさせることで、聴いているというシグナルをできるだけ出すことが大切になります。

次にストロークです。ストロークというのは相手の存在や価値を認める様々な行動です。まず挙げられるのがスキンシップによるストロークです。抱きしめたり、手を握ったり、肩を抱くなどの態度や行動です。2つ目は言葉によるストロークで

す。学生が挨拶したら、きちんと挨拶する。声をかける、褒める、励ます、そして共感するなどの態度や行動を指します。3つ目が表情や態度のストロークです。笑顔、アイコンタクトなどがこれに当たります。

挨拶の基本です。まず笑顔を作ることです。そして、相手の目を見て、名前を呼ぶ、挨拶そして一言声をかける(small talk)、そして自己紹介をするという順番です。一声声をかけるとはどのような事かという、天気予報が一般的で、「今日は風が強かったですね」、「台風の影響で電車は止まりませんでしたか?」などです。見たままを口に出すのもいいです。「すてきなネクタイですね」、「お元気そうですね」などです。最近の話題を持ち出してもよいです。「東京駅のライトアップがとてきれいですね」などです。一言会話に入れることだけで、親近感を持つことにつながります。

出会いの挨拶は人と人をつなぐ魔法の言葉です。「おはようございます」、「こんにちは」「こんばんは」とたった一言でお互いの“心の距離”は一気に縮まります。挨拶は笑顔で、目を見て、そして、名前を呼ぶがセットです。

表情も非常に大切です。感情というのは、必ず表情に表れます。感情は相手や周囲に感染します。ですから、先生同士がいがみ合っていればその学校は嫌な雰囲気に包まれます。教員同士がすぐく仲良く笑顔でやっていたら、学生もすぐ明るく振舞います。向かい合うときには“笑顔”が大切です。必ず目も口も同時に笑顔を作ることです。

言語以外(非言語)のコミュニケーションとは、身だしなみ(洋服や装身具)、相手との距離や立ち位置、態度・姿勢、身振り・手振り、表情そしてアイコンタクトがこれに相当します。特にアイコンタクトは重要です、鼻の周辺を見て話します。ただし、1分間ずっと見ていると緊張します。1分間に30秒、すなわち半分はこの範囲を外すようにするとよいと思います。目を外すときは上下に外すことです。何故ならうなづくときには必ず上下に振ります。左、右に視線を移すのは駄目です。否定するときは必ず左右に振りますから。

言葉に準ずるコミュニケーションとは、声の高

さや大きさ、話すスピードや間の取り方、話し方や言葉遣いです。特に大切なのは話すスピードです、自分でちょうどいいと思うより、少し「大きく」、「ゆっくりめ」で話すことです。ただ話し方をずっとスローに話すというのは、結構難しいし、また聞く側はまどろっこしくなります。

「例えば」とか、「ところで」とか「一方で」、といった、つなぎ言葉のところをゆっくり言って、さらに間を取るようにしていくというのが良策です

3. 学生からのメッセージの受け止め方

学生からのメッセージをどう受け止めるかが、一番、頭を痛めるところです。学校生活が楽しいと感じる学生は 97~98%ですが、一方辞めたいという学生が 2~3%はおります。辞めなくなる時期は1年次の専門教育のつまずき、そして2年次以降は専門科目実習におけるグループ活動のつまずき、臨地実習における現場体験での戸惑いと、大きく3つに分かれるようです(図5)。

まず、1年次の専門科目教育のつまずきです。学生は夢や希望に膨らんで輝かしい未来を想像して入学してきます。くさび教育と称して、教養科目に専門科目が組み立てられています。ところが、学

生にとりましては専門用語が理解できないのです。ある単語を教員がいうと学生はその単語を今までに得た知識で解釈します。例えば、教員が“さいきん”と言うと、学生の頭に浮かぶのは“最近”です。“けんたい”という“携帯”かなと思ってしまいます。今までに知っている言葉に無意識に置き換えてしまいます。まず専門用語でつまずきます。くさび教育は決して悪くはありませんが、その解決策として、専門用語の解説をするのがよいと思います。授業に使う専門用語の説明プリントを配布するのは学生が理解をするうえで大いに効果を発揮します。

次のつまずきは、専門実習におけるグループ活動です。実習前は専門科目実習を行うことによって、グループ活動を行うことで協調性を学ぶことができますし、レポート提出で、文章力・考察力を養えるという教育効果は非常に大きいことだと思います。ところが、実際にやってみると、今の学生はあまり他人と共同作業をしないので、他の人よりも実習の手順が遅かったらパニックになります。するとレポートの提出が非常に負担になる。この解決策としては、グループの中でリーダー格の人にフォローしてもらるか、教員がレポートの

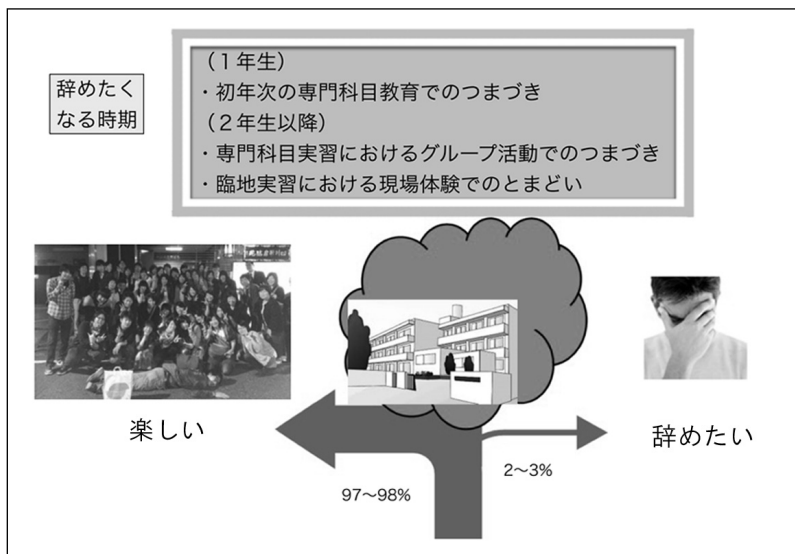


図5 学生からのメッセージ

書き方を指導する。そして実習中だけで終わるのではなく、実習終了後にレポートの概要だけでも書くことができる時間を与えるということがよいでしょう。

次に臨地実習における現場での戸惑いです。学生は、臨床検査技師は医療分野で重要な職業と教えられていますので、将来の臨地実習は将来の職場体験をできるよい機会です。ところが、臨地実習に行き、実際の臨床検査技師の仕事を見て、自分にはとても不向きだと思ふ学生が出てきます。そういう学生には、病院以外の職場、例えば、治験コーディネーター、出版社、臨床検査薬関連企業など選択できる職種を説明し、その学生に向けた職種の選択に力を貸すことです。さらに勉強したければ大学院への進学もよい選択肢の一つです。臨床検査技師として病院以外にも、活躍できる分野が多いことを指導してください。

4. 教員に求められるパフォーマンス

パフォーマンスとは、相手にどう見えるか。どう受けとめられるか、そして自己呈示を演技的にコントロールすることであり、

これには3つあります。1つ目は明快に言い切る。教える内容を整理して、結論を絞って、言い切ることです。2つ目はポリシーを持つことです。1つか2つ、教員として「これだけは譲れない」

という方針を持つことです。3つ目は相手を尊重することです。対等な人間同士として学生に接する気持ちを忘れないことです。

最後に

大学または専門学校の教育というのは、教育と学生の間の双方向に行われる行為的な伝達作用です。教え-教えられ、そして教えられ-教えて、お互いに学びあう学習が存在しなければなりません。教員は学生を更なる未来へと導く使命があります。それによって、学生は医療に対して意欲・積極性に目覚めて、生きがいを見いだします。そして、学生は学習することによって、新しい知識や技術を獲得していきます。学生は社会人として巣立つという自覚が出てきます。

私達、教育者の生きがいは意欲を持った学生が世の中に元気よく巣立っていく事だと思います。

文 献

- 1) 大島 武. プレゼン力が授業を変える! 東京: メジカルフレンド社 2012
- 2) 生利喜佐男. 患者満足はコミュニケーションを通して生まれる. 東京: アート印刷 2011
- 3) 高谷 修. 看護教育方法. 金芳堂 2012